

# 教育情報化コーディネータの活動分析

## Analysis of ITCE\*1 activity and their tendency

中川 斉史

NAKAGAWA, Hitoshi

鳴門教育大学大学院総合学習開発コース

Dept. of Basic Human Science for Integrated Studies,  
Naruto University of Education

生藤 元

IKEFUJI, Gen

三好郡教育ネットワークセンター

Miyoshi-gun Education Network Center

<概要> 2年間のITCE的な活動者(ITCE+校内情報推進リーダー)の行動について、内容等を分析し、どのような業務内容をどのくらいの割合で行っているのか、また、それらの魚無水校において、どのような問題が生じているのかについて、その傾向を明らかにする。

<キーワード> 教育情報化コーディネータ 教育施策 教師教育 教員研修

### 1 はじめに

ITCEの資格制度が認定されるようになって2年がたつ。この資格はJAPEIT(日本教育工学振興会)が認定し、活動を想定しているが、現実的には、これらの活動をこなす立場にある人間はほとんどいない。

正来(2002)は、ITCEは、現場の実情把握と教員ニーズに応えるための頻繁な学校訪問などの対応が不可欠であるので、それらに必要な権限と業務上の配慮(時間確保)を保証することが重要であることを明らかにした。

本論文では、ITCE資格が想定している活動と同等の活動をした人間の行動を分析し、今現場に求められているITCEの現状を分析するものである。

### 2 調査地域

徳島県三好郡には、8つの町村が共同運営する「三好郡教育ネットワークセンター」が1999年に設置された。学校インターネット事業\*2のための地域ネットワークセンターの位置づけである。通常、郡単位の教育行政組織は存在しないが、広域教育ネットワークの拠点として、サーバ管理、クライアント管理、研修はもちろん、各自治体での情報環境整備などの助言をしながら、異なる行政単位間の

情報教育に関する研修や環境整備のコーディネートを行っている。

センターには、1-2名の(年度により人数が異なる)ICT(Information Communication Technology)コーディネータと呼ばれる役職があり、様々な活動を現場に対して行っている。この役職は、校内情報推進リーダーとITCEを兼ねたような存在といえる。所属校があり、情報加配扱いのため、所属校での授業や校務分掌を遂行しながら、センター業務をメインで行っている。彼らの行動は、現在のような過渡期におけるITCEの典型例として取り上げてよい行動をとっていると思われる。

### 3 調査内容

#### 3-1 担当エリアと移動時間

三好郡は山間部に位置し、エリア内の学校数は、小、中、高あわせて55校(分校含む)である。センターを中心として、車での移動時間は、最大120分である。山間部のため、道が枝状にわかれ、より移動が複雑になっている。また、1本道のため、途中の道路工事による時間通行制限も無視できないほど多い。そのため、現場を訪問しての業務のうち、移動時間の占める割合は、図2に示すとおり、大きな位置を占める。

\*1 Information Technology Coordinator for Education

\*2 先進的教育用ネットワークモデル地域事業(文部科学省と総務省の共同事業、通信・放送機構(TAO)に委託され実施)

### 3-2 業務内容

本センターでは、コーディネータの役割を図1に示すような位置として考えており、表1にあるような具体的業務を行っている。これらは主にICTCEで想定されている内容を含むものであるが、特徴的なのは、現場の各担任に対しても直接授業支援をしている部分である。これらは、校内の情報推進リーダーの役を兼ねているとも言える。

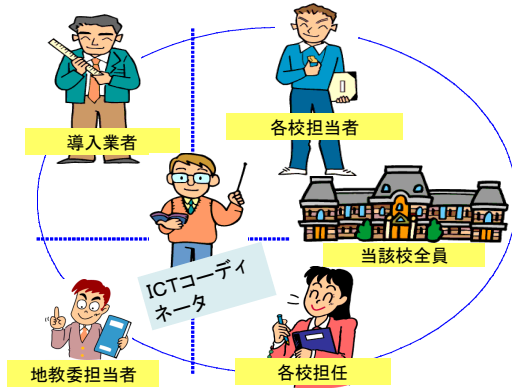


図1 三好郡のコーディネータの位置づけ

表1 具体的業務内容

相手	具体的内容
各校担任	授業支援
各校内情報担当者	校内研修支援, 技術支援, 校内情報運用支援
地教委担当者	仕様書相談, 検収作業, 最新動向報告
導入業者	仕様書相談, 運用形態相談

### 3-3 各項目の時間的内訳

3-2 で述べた業務の時間的内訳についてみると、図2のようになった。目に付くのが、移動時間であるが、これは、山間部に学校現場が散在しているため、現場を訪問するのに相当な時間を使っていることがわかる。

また、現場支援の時間に34%費やしており、3-2 で明らかにしたようにエリア内の学校の情報担当者に対してだけでなく、学校全体やおのおのの担任に対しての細かい支援をしていることがわかる。さらに、ICTコーディネータは、所属校の情報加配扱いであるため、所属校の授業や行事にも時間を割いて

いることがわかる。

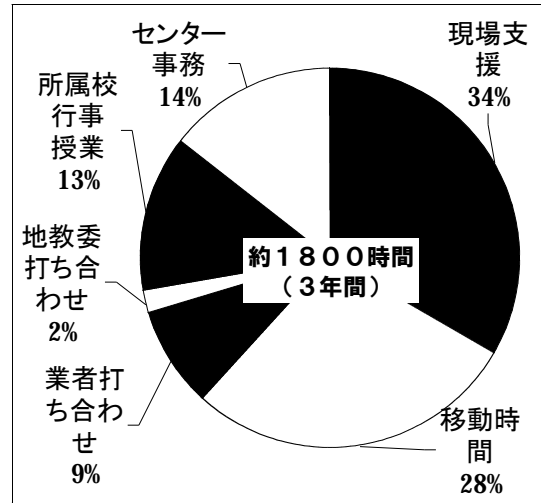


図2 3年間のICTコーディネータの

### 4 考察

以上のことから、過渡期にある現在は、学校現場の問題解決を柔軟にこなし、フットワークよく活動していくことで、学校間格差をなくし、地域全体の情報化をすすめていくことが、ICTCEに望まれていることがわかった。特に担任への授業支援が多く発生することから、各学校に情報推進リーダーが配置され、授業支援体制が校内で整えられるまでは、ICTCEは、授業を実際に行える教員であることが望ましいのではないかと考える。また、現在の教員配置とは別の形でICTCEが配置されることが望まれる。

なお、さらに細かい行動分析を現在も行っており、今後公表の予定である。

### <参考文献>

- ・正来 洋(2002) 小学校教育課程における情報教育のあり方～教育情報化コーディネータの現実的課題とその解決のための方策の一考察～, 平成14年度金沢大学内地留学生報告書
- ・中川齊史(2002) 教育情報化コーディネータの役割と実際, 学習情報研究 2002, 3月号 pp21-24
- ・中川齊史(2003) 情報教育を推進するための地域ネットワークセンターのあり方, 学校インターネット中間発表会資料集(鹿児島県川内市) pp175-176
- ・内山恵美子・堀田龍也(2002) 情報化推進リーダーとしての力量向上をめざした講師体験研修カリキュラムの開発と評価, 日本教育工学会誌 26(Suppl), 157-162